

## 急行「瀬戸」の青春

仕事で東京出張の空き時間を利用して新橋駅前にある鉄道マニア向けの小さな店にフラツと入ってみた。やっぱり鉄道オタクと思しきが沢山いて、やれ「この列車の車両は昭和三十九年製のものである、その証拠に屋根に乗っている冷房機が四つしかない」とか「四国カラーのキハ〇〇式特急ディーゼル気動車は今では振り子式キハ〇〇に代替されていて非常に珍しい」とか、やたら専門家ぶって展示されている鉄道模型のウンチクを言いながら大きな態度をとっていて、私など素人が入る店でない事は最初から明白だった。

せつかく来たのだからと何か土産はないかと詮索していると、古本の時刻表が目にとまった。それも昭和四十五年出版の交通公社時

刻表である。

ジーンと思い出してくる出来事があった。急いで宇野線の東京行きのパージをめくると宇野発十六時十分、東京着翌朝六時三十分の急行「瀬戸」が載っている。懐かしいのと当時の悲しかった思いが複雑に絡みながら私の脳裏に四十五年前の記憶が鮮明に蘇るのであった。

今でこそ四国と本土は三本もの橋で結ばれ、鉄道の高速化と高速道の整備も相まって、四国各地から上京することはさほど苦勞な旅行ではなくなったが、私が高校四年生（大学浪人一年生とも云う）の時代は徳島から東京へ行くのは簡単で楽なものではなかった。

忘れもしない昭和四十一年十一月二十二日午後一時すぎ、私は徳島駅発の高松行き急行「阿波」の車中に居た。東京までの長い道中の始まりに際し特別な思いも目的もなかったが何故か遠くへ行きたかったのだ。浪人生活に疲れが出たのか、はたまた思いつたのには確かである。

海路、大阪まで行き新大阪より新幹線を乗り継げばもつと楽に東京まで行けるのだ

が、浪人の身の私には金銭的な問題から格安のルートしか選択肢はなかった。

果たして東京までの旅は大変だった。まず高松駅にて宇高連絡船に乗船するところからその苦労は始まる。つまり連絡船では絶対に着席せずに約一時間の航海中、乗船口にて立って我慢する。当時は連絡船も満員で立っているだけでも大変なのだが効果はすぐに出る。

宇野の棧橋に連絡船が着くや否や、乗船客は先を争って宇野駅のホームを目指して走るのである。西宮戎の一番福の争奪と似ていて、開門と同時に大勢の乗客がドツと駆け出すのだ。もちろん急行列車の座席の確保の為である。

急行「瀬戸」は二等自由席が六両、あとは食堂車、一等指定席車、一等寝台車、二等寝台車そして郵便車の編成であり我々二等兵は早い者勝ちで座席が確保される仕掛けなのだ。

連絡船の中で椅子に座ってくつろいで居た者は、当然この座席争奪戦に敗北し東京までの約十四時間を通路やデッキで我慢を強いられるハメとなる。

いざ座席が確保されたと言っても、決して快適な乗り心地ではない。四人が向き合って二人ずつ座るため膝がくっついて足を伸ばすことも出来ない、背もたれはニスを塗りたくった匂いのする板だけであり、しかも垂直だ。リクライニングシートという言

葉はその後暫く経って知ったものであった。乗客四人がまんじりとも出来ず、互いにニラメッコ状態で東京までの十四時間はさすがにキツかった。ただ当時は誰も不平も言わないでお互いが気をつかいあつて仲良く我慢していたものだった。

岡山駅からは弁当売りのお嬢さんが乗ってきて、あまりの可愛さに思わず買ったのが名物「祭り寿司」だ。私の席の全員が同じ弁当を買ったものだから、食事は自ずと楽しいものになった。

すぐ前の紳士から「君はどここの学生さんかね？」と尋ねられ「余計なことを・・・」と感じつつ、「浪人です、来年もう一度頑張ります」とだけ返事するのが精一杯で心底、悲しくなった。

すぐ横のオジサンは船乗りで今治の実家に休暇で帰り、これから鹿島港の貨物船まで戻るとのことだった。もう一人いたはずだったがその人の事は残念ながら記憶がない。

名古屋が近くなった頃だったろうか、前の紳士が「ちよつと行こう」と声をかけて私を食堂車へ連れて行って下さった。勿論、食堂車なんて始めての経験だったが勧められるままにビールとハムサラダをご馳走になった。

来年の受験は頑張りなさいよ、受かったら連絡をくれといって名刺を頂いたが何処

かの会社の社長さんだった。翌年の志望校の受験にはまたもや失敗、滑り止めの大学への転進を余儀なくされたが、その旨報告すると「おめでとう、大学ばかりが人生じゃない」とその内容の返事までくださった。今ではその紳士の名前も会社も顔すらも、すっかり忘れてしまったが、あの時、ご馳走になった事だけは決して忘れない。さりげなく私を励まして下さった好意に今もって、ただただ感謝している。

その後、急行「瀬戸」の運行はなくなり、特急寝台「サンライズ瀬戸」という贅沢な寝台列車となって現在も運転されている。試しに利用したものの快適な睡眠は約束されこそすれ、何の感激も出来事もなく東京に到着した。

あの頃、私は確かに辛かったが一方で何かキラキラするものを感じていた。今でも岡山駅では必ず「祭り寿司」の弁当を買うのが習慣となっているし、食堂車ではハムサラダを注文しなければならぬと信じている。JRに食堂車が無くなってハムサラダの機会は失われたが、「祭り寿司」の機会はこれからも続く・・・青春の多感な時期に刷り込まれた習慣はちよつとやそつとでは消えそうもない。

平成二十三年七月 著